（第3種郵便物認可）　2023年（令和5年）10月9日（月曜日）　讀　賣

読売歌壇

小池　光　選

コーヒーを飲もうよ姉と喫茶店初めてかもな七十路にして　福山市　石川　茂樹

【評】姉と二人で喫茶店に。こんなことこれまでいっぺんもしたことなかった。七十路になって初めて姉さんと入る。コーヒーの味、甘く苦く、なかなかのものだ。

ふくしまの大きな桃を買いました疲れた我へご褒美として　古賀市　上田　律子

【評】大震災、原発事故、今度の処理水放出と、福島は災難を一手に引き受けている感じだ。その「ふくしま」への応援。大きくて立派な桃を買う。わたしのためにも。

一本のバナナに力たくはへて炎暑の畑にあら草を引く　青森市　安田　渓子

【評】炎天下の畑に出てゆくために、バナナ一本食べる。ちょっと意外な食べ物で、そこがおもしろい。バナナの偉大な力信じて。

レコードが牧場の朝に流されて牛は大きな乳房を揺らす　山形市　柏屋　敏秋

小さくとも明日に予定ある時は老の暮らしに張りあいが出る　兵庫県　和泉　純子

飛蚊症の虫がぱあっとあらわれてあかるき朝の空にひろがる　秦野市　星　光輝

初めての入選歌より二十七年　老い深まれど詠むは娯しき　高石市　出水美智子

亡き夫の口癖だった「大丈夫」の言葉が今も心のささえ　仙台市　佐藤　久美

発射台のロケットのごとすっと立ち明日を夢見る朝顔一輪　仙台市　土生　博子

真桑瓜の黄ばみて甘き香を放つ畑を巡りぬ夏の夕暮れ　綾部市　松下二三夫

栗木　京子　選

稲刈り後に籾入れ回す乾燥機夜通し続く音を憚る　匝瑳市　鈴木　良雄

【評】稲刈りの後、籾をすぐに乾燥させたくて夜通し機械を回している。近隣も農家だった頃はお互い様だったが、今は周囲に気兼ねしてしまう。下句に時代の流れが見える。

夏帽の折り皺どうにも取れなくてもつと気になる法令線は　神戸市　西　和代

【評】法令線は小鼻の両脇から左右の口角にのびる縦皺。この線が深くなると老けて見えることもあるようだ。秋に向けて表情を整えなくては、という意気込みが伝わる。

購ひし万年筆の試し書きとき母の名を連ねて書けり　四日市市　酒井ツタ子

【評】新品の万年筆から流れ出る新たな文字の列。試し書きとはいえ、特別な心情がこもる。「連ねて」がこまやかに感じられる。

隣り町の祭り近づき夜八時三人娘が祝儀集めに　岸和田市　岡本　雅子

門外漢の筈の婚約者から言はれしよ「塚本邦雄を読んだらどうか」　青森県　田口　昭子

吾が視線捉へ画眉鳥啼き止みぬ日昇る前の森の静けさ　町田市　山本喜多男

秋晴れに稲刈りゆけばイナゴ飛ぶ運動会の玉入れのごと　新発田市　本田　政嗣

君のいる会社の車内広告を君の便りのごと読む通勤　越谷市　吉村　花緒

四歳が早起きをしてお手伝い自分のパンのジャム多くする　群馬県　金子　歩美

わが肩ににいにい蟬の降らす音を受けて分け入る森蒸し暑し　熊谷市　飯島　悟

俳　万智　選

まず土地に杭を打ち込むようにして二人暮らしにたてる歯ブラシ　越谷市　あきやま

【評】ともに暮らすとは、歯を磨くというような日常を共有すること。週末の逢瀬に花を飾るのとは違う。基礎工事の杭としての歯ブラシ。上の句の比喩がみごとだ。

目的地などない夜のおさんぽの一緒に歩くという目的　大和郡山市　本田　岳

【評】散歩とは、そもそもそういう側面を持つものではあるが、景色さえいらない「夜のおさんぽ」の幸福感が伝わってくる。

図書館の児童書コーナーひらがなの柔軟体操する声聞こゆ　東京都　富見井高志

【評】子どもたちがいない間は、文字がおしゃべりしているという楽しい空想。「柔軟体操」が、ひらがなの柔らかさとマッチしている。

「桜の園」なりあがりたるロパーヒンの台詞にでてくるキエフ・ハリコフ　東京都　野上　卓

恋人が他人になったその夜にキャベツ半分ラップに包む　入間市　大野　美波

我が家前に違法駐車のキャデラックその白消すごと葉書に短歌を　東京都　安井みどり

茗荷の葉さらさら鳴らし夕立の気配を風が運び来るなり　狭山市　奥薗　道昭

ミニトマト育てゐる子が走り来て朱い電気が点いたと笑ふ　青梅市　諸井　末男

迂回してなだらかな道さんぽする道がひとつでなくてよかった　堺市　一條　智美

チェッカーで対戦しようと言ったきり会えない友が私にはいる　東久留米市　中里　正樹

黒瀬　珂瀾　選

ロレックス一生買へねどそこに優るひとつ吾が詩の載りし「若人」　小田原市　後藤　忠国

【評】「若人」は昭和三十年代に学燈社から出ていた若者向け雑誌。詩の投稿欄の選者は北川冬彦だった。若き日の一篇の詩がこうして一人の人生を支えることもあるのです。

この家で義母弔いし鯨幕を留めし押しピン錆びて残れり　廿日市市　小畠みどり

【評】昔は、自宅で葬儀を出していた地域もあった。義母の葬儀の際に刺したピンが、気付けば壁に残っていた。古い家には、代々の家族の記憶が今も住み着いているのだ。

待遇の不満漏らせば仲間らはエッセンシャルと自嘲するなり　館山市　川名　房吉

【評】清掃やごみ収集、バス運転手など、社会維持に欠かせないエッセンシャルワーカーが却って低賃金という現代の矛盾を突いた。

校正の済みし夕ぐれ風花に国見の山の主峰あきらか　横浜市　矢沢　寿美

茄子一個ピーマン数個の収穫が朝のしあわせ微風の秋に　淡路市　河合　律子

撫でてみせ叩いてみせて西瓜売り終にはこれでもかと切ってみせ　町田市　谷川　治

生き下手な吾がカツ丼食しつつ負け丼あってよしとも想ふ　笠岡市　藤井きょう

生き易き世を築かんと駆け抜けた伊藤野枝こそ太陽なりき　筑紫野市　桂　仁徳

五分間じっと未来を待つ吾にカップ焼きそばごほうびなりぬ　富山市　正源　孝志

福島の魚食みいる大臣の無味無臭なるテレビの画面　水戸市　加藤木よういち

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本橋郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はおみなえし